

疑似科学

Pseudoscience

金沢大学名誉教授

久野 滋

先日日本で文庫本売り場を漠然と眺めていたところ「奇妙な論理 (In the Name of Science)」(Martin Gardner 著, 市場泰男訳, 現代教養文庫) という本を見つけました。著者の Gardner は Scientific American の数学ゲームを長年担当し、多くの科学解説書の著者として高名でありましたので、余り内容を良く調べずに購入しました。読んでみますと内容は科学と主張しながら正当科学から見て到底科学と言えないような理論について多くの例を解説したものでした。常識的に考えてこのような文献の調査は極めて難しいので、著者の行った膨大な調査、検証には驚かされました。

ただ一口に疑似科学と言っても正当科学との識別が困難な場合があります。歴史的にみても、偉大な理論の発見者が当時の頑迷な正当科学者の強硬な反対のため長年月に渡って無視された例は多数ありますし、或いはその理論の検証の困難さの故に現代に至ってもその正否を断定できないものもあります。又高名な科学者が晩年疑似科学に熱中した例もいくつか知られています。例えばニュートンは晩年錬金術に没入していたと言われます。そもそも現代の医学研究の大きな発展には、仮設の提示、その仮設から綿密な演繹を経て実証可能な推論を行い、その推論を検証するという課程から生まれてきました。当然のことながら多くの仮設がこの課程で捨てられます。この仮設の放棄が出来ず、それに固執する余り、当人及びその同調者以外には理解困難な理論をもって説明しようとする時疑似科学が生まれます。当然周辺の人々から反論の価値すらないと無視され、との主張が次第に paranoiac になるケースが多いようです。それ故研究者は多かれ少なかれ疑似科学に陥る危険性を持っていると言えましょう。

疑似科学の歴史を見ると、医学の分野で群を抜いて栄えてきたように思われます。日本ではなじみが薄いようですが、普通の英和辞典にも記載されている

homeopathy (同種療法) は提唱されて200年近くの命脈を保ち、現在衰えたと言っても一部の国では未だに尊重されているようです。これ以外に各種の医療又栄養理論は枚挙に暇がないほど存在し、日本でもこの種の流行のあることは良くご承知のことでしょう。厄介なことはこの種の主張は初めから全くのインチキの金稼ぎ手段と分かるのは一部で、多くは当人達が真面目に信じていることです。どの様な療法、健康食であれ、その処方で軽快、時には奇跡的な治癒 (つまり placebo effect) 例のあることは確実です。従ってその処置を非科学的だと非難したところで、その効果を認めてくれる証人を何十人も出すことは少しも難しくありません。たとえインチキと思ってもその提唱者がよくよくへまをしない限り科学的に反論することは困難です。昔癌ウイルスを発見したと主張したお医者さんが、それまでに何千枚の電顕写真を撮影したと言いながら、電顕でウイルスが茶色に見えたと言って馬脚を現したのは珍しい例外です。金沢の近くでも十年ほど前ある種の炭素族の元素が微量で効果があると宣伝され、それを信じた方の家族から説得を依頼されて閉口したことがありました。その際科学者として世間で良く知られていた方がその療法の推薦者の一人となっていられるのを知り驚きました。薬等が効果がないことを科学的に証明することは、効果があることの証明と同じくらい難しいことで、言葉だけでの説得には限界があります。この療法は幸い2, 3年で消滅しましたが、今後同じ様なケースはいくらでも起こることでしょう。

一般人は科学者のような頭の良い人はベテンを見破る力があると思っているようですが、実際には科学者が一番だまし易い人種とされています。Uri Geller らの超能力者に対して欧米の多くの数物理学者が心酔していたことは良く知られています。科学者は自分の目を信ずる傾向が強いと言われていることを我々は銘記すべきでしょう。